

講師 中込 敏夫 先生

(演題1 コバルトコーヌスの世界)

部分欠損の補綴装置にコーヌスクローネを適用すると次のような利点がある。

- 1・患者の使用途中での残存歯や顎堤等の変化(設計の変更)が可能
- 2・補綴装置のチェック(例えば咬耗など)がしやすく、修理・修正が容易
- 3・外冠(上部構造体)を外すことにより、残存歯および周囲組織のメンテナンスの確実性が増す

4・確実なリジットサポートの実現

5・外冠(歯冠部)と床部人工歯が一体化になるため、咬合に悪影響を与えない

さらに、コーヌスクローネの金属骨格となる内冠・外冠やフレーム構造をコバルトクロム合金で製作することにより、次のような利点が追加される。

- 1・金属の強度が高いため、長期に渡り内冠・外冠の形態変化が少ない
- 2・金属の強度が高いため、基本的にメジャーコネクター等を必要としない
- 3・補綴装置の軽量化を計ることができる(白金加金使用時の1/2以下)
- 4・金属の単価が安いため、患者の負担を軽減することができる
- 5・金属の接着力が高いため、外装材との確実な接着処理を行うことができる
- 6・ほぼ全ての補綴装置に使用可能なため(例えばダウエルコアやメタルボンドクラウン等)、口腔内における使用金属の同一化を図ることができる

本講演では、コバルトクロム合金を用いたコーヌスクローネの製作方法について報告する。

(演題2 義歯に血の通うまで)

機能性と審美性を兼ね備えた総義歯は、無歯顎患者のQOL向上に大きな福音をもたらすことになる。そのため、高齢化社会をむかえた今日、より良い総義歯製作はさらに強く求められることとなろう。

しかしながら、総義歯は通常の補綴装置の中では最大の大きさであるにもかかわらず、製作をするための情報が極端に少ないため、難易度の高い術式の一つといえよう。そのためなるべく多くの情報を得、それを総義歯製作に反映をしていくことが重要なこととなる。

また総義歯製作において、スタンダードな形のイメージを持ちながら、作業を進めていくということがとても重要になる。

ここでは、基準をたよりに得た情報を、イメージとする総義歯の形に反映をさせながら、システムティックに作り上げていくポイントを解説したいと思う。

(講師プロフィール)

中込敏夫(Toshio Nakagomi)東京都豊島区/JADE 開業

1984年 横浜歯科技術専門学校 卒業

1985年 新宿アルプス歯科 勤務

2006年 JADE 開業